

No.61 2003.1
(株)よかネット

NETWORK

<ひともうけ通信15>

障害者8人、健常者5人、近所のパートのオバサンたち20人と、…………… 2

“そうじ、くさかり、あとかたづけ”とビルメンテナンスを仕事にした株式会社

…暴走型ネットワークづくりの達人、㈱なんてん共働サービス社長溝口弘さん…

協同組合 地域づくり九州まちづくりセミナー ……………… 6

黒川温泉繁盛物語 ~儲かる旅館組合だから、自前のまちづくり事業ができる~

警固神社にプランナーが集まり、都市周辺地域のまちづくりと、…………… 9

田園居住を考えた ~九州都市計画シンポジウムの報告~

にぎわいづくりは手作りで~「もりまち町並み美術館」の取り組み~ … 11

見・聞・食

お店の壁にカニ、カニ、カニ！ ……………… 13

「なにわ食いしんば横町」は、大丈夫か ……………… 15

近況

ハーブガーデンと日英グリーン同盟 ……………… 16

マルクスさんとの対話その① ……………… 17

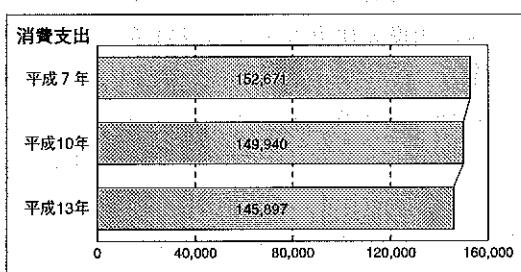
懐かしいふたりに思うこと ……………… 18

一族のルーツを訪ねて ~謎はさらに深まった~ ……………… 18

広報担当をきっかけにいろんな出会い、体験をさせてもらっている … 19

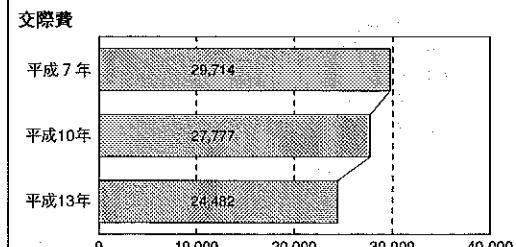
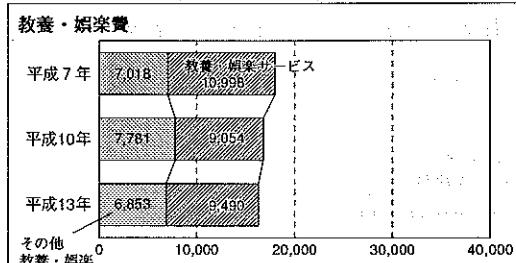
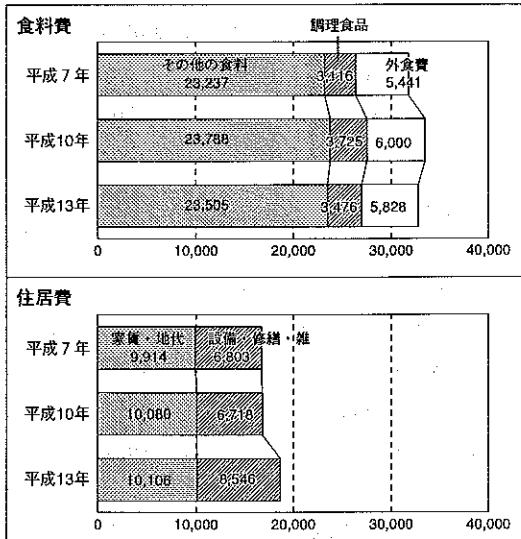
ボランティアは体力勝負！ ……………… 20

●消費が伸び悩む中、高齢者は「食」、「家」にお金かけるものの、人との関わり消費は抑えるようだ。



高齢者のみの世帯の消費はつかめないので、単身高齢者（60歳以上）の消費支出で、高齢者世帯のお金の使い方の全体像を類推した。平成7年当時に比べて食料費の中ではレトルト食品・外食費、家の修繕・設備費にお金を使っているようだ。

しかし、交際費や教養・娯楽サービス（パック旅行、宿泊料、月謝、ゲーム代等）など、人との関わりごとのお金を使うのは控えるようだ。



資料（単身世帯収支調査年報：デフレーター補正）

**障害者8人、健常者5人、近所のパートのオバサンたち約20人と、
“そうじ、くさかり、あとかたづけ”とビルメンテナンスを仕事にした株式会社
……暴走型ネットワークづくりの達人、(株)なんてん共働サービス社長溝口弘さん…**

糸乘 貞喜

●21世紀のムラオサの誕生？新しい、地域のネットワーク形成の、モデルになるかもしれないこの人は「何者なんだろう。地域にとって何だろう。家族にとって、友人にとって、どういう存在なんだろう」と思った。溝口弘という男をどう捉えればいいのか、どう紹介したらいいのか、書きあぐねていた。

本当のことをいうと、会社以外にも、男女それぞれの知的障害者グループホーム、デイケアハウスを運営しており、さらに痴呆性老人のグループホーム（G・H）をこの12月にスタートさせる。このG・H建設費の予算書には、補助金収入2,500万円、雑収入4,000万円としか載っていないが、この4,000万円は借金である。「私には銀行が金を貸してくれないので、みんなに保証人になってくれるように頼んだんですが……」と溝口さんがいう。溝口さんにはすでに前科がある。

デイケアハウス共生舎を、周囲の反対を押し切って作った。「なんてんに係わる会」の人たちに相談すると、「これ以上借金を抱えてまでしてやるな」といわれたが、自分名義では銀行から借金出来ないので、息子名義で借金をし、会員や田舎で暮らす兄弟から借りて、民家を買って始めてしまった。

とりあえず走り出してしまうような溝口さんを、周囲の仲間たちはハラハラドキドキしながら、見

守り支えている。とはいっても、先の見えない借金の保証人になるわけにも行かない。結局、七人衆を中心とした友人たちが、2%の金利・10年返済という条件で貸すことになった。もちろん、それぞれがNPO法人の中心メンバーではある。

私はまだ、溝口さんには4～5回しか会っていない。その時の顔、奥さんの顔、話、案内してもらった会社やグループホームなどを思い出し、いただいた記録を読んだりしながら考えていたことは、「この男は新手のムラオサかもしれない」ということである。

昔は、農村にしても、都市にしても、漁村にしても、そこに住む人は、住む場所に関わる仕事をしてきている。その人の生業（なりわい）が、住んでいる場所と全くかかわりがないなどということは、泥棒を仕事とする人以外考えられなかつたに違いない。しかし現代は、大量生産型のモノづくりや、大量供給型のサービス業の場合は、その土地とかかわりのない仕事が多い。働く人も生産の現場近くに住んでいるわけではないので、住まいの移転はフリーである。つまり、農村地域でも二種兼業の通勤主体の暮らしが多くなってしまっており、サラリーマンでなくとも住まいの移動は自由であるので、子供の学校の問題もあって、若い人たちは都市に移住してしまう。

今では、水の回ってくるのに対応して、共同で田植えをするわけではなく、近所の家に頼まれた豆腐や桶などを作るのではなく、一緒に漁に出るのでない。仕事での共働という、ある程度強制的な地域システムは存在しなくなってしまった。仕事や商売では、地域のつながりを必要としなくなっている。しかしだだ一つ例外がある。

たまたま障害者に生まれてしまった人や事故で不自由になった人は、遠くまで通勤しながら働いて生きていくというようなことは難しい。年を取って動きが不自由になった人も、土地に縛られやすい。溝口さんがやっているのは、まさにこの地

環境整備一般
なんてん共働サービス
清掃維持管理業務の御案内

- そうじ、くさかり、あとかたづけ—
- ◎ 宅地、宅地予定地の清掃
 - ◎ 会社、工場などの清掃維持
 - ◎ 建築、土木工事などの跡片付け
 - ◎ 排水、下水施設の清掃浄化
 - ◎ 大小道路、河川の清掃管理
 - ◎ 公園など、公共施設の清掃管理
 - ◎ 各種店舗の清掃管理
 - ◎ 農園、庭、畠地などの維持管理など

〒520-31
滋賀県甲賀市石船町西寺35 G-11
※ (074877)-3959
代表 溝口 弘

なんてん共働サービスを個人事業として始めるに当たって配ったあいさつ状（南天通信から引用）

域に縛られ、それでいて絶対にないがしろには出来ない仕事である。昔と現在を比べて、次のように見ることが出来ないかと考える。

- ①昔の町年寄り・村長（むらおさ）＝稼ぎと暮らしが全般にわたって町人や村人を指導した。
- ②今の町年寄り・村長（むらおさ）＝商売はバラバラになり、稼ぎの面では、一つのシステムで指導する必要はない。強いていえば、一般的稼ぎについていけない人の仕事には配慮する必要がある。また暮らしの面でも、生活や教育全般ではなく、みんなが係わる分野（子供のしつけや教育、知的障害者・身体障害者・不自由な高齢者）でのサポートなどをするべき。

結局、溝口さんが日頃いっている「自分が住みたいと思う場を作る」「障害者や高齢者と共に、地域の中で普通に、淡々と暮らしていきたい」といっている言葉の示す範囲が、現代のムラオサのテリトリーになっているように思う。一つだけ気になることは、「淡々と暮らす」という日が、溝口さんやその回りの人たちに、いつ来るかということだろう。

●どんな事業をしているのか

実は、会社になる以前に十年の歳月がある。それ以前にさらに十年間、田村一二氏に師事して知的障害児・者の施設にいた。その時の思いから「収容ではなく、障害者のいられる場」を求めて出た。そのことは溝口さんが書いているので南天通信第6号（1989.10.1）から引用する。

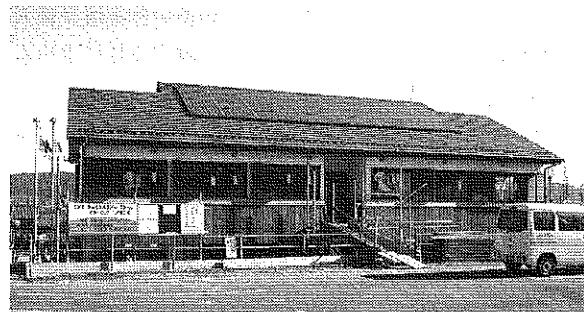
なんてん共働サービス

56年9月1日に業務を始めました。スタート当初は私たち夫婦とT君の3人でした。最初の1年間は仕事も切れることが多くて、ずいぶんつらかったです。

施設職員として約10年勤務したあと、この仕事を始めた訳ですが、その動機はつきつめればやっぱり障害者の隔離収容の上にのっかって給料をもらってた、ということと、共に生きるなんてことは少なくとも、現在の施設の中では嘘っぱちである、という自らの差別に対する反省がありました。

共働の事業の内容は、外廻りのメンテナンスと銘打って、病院や工場や県道や個人の住宅などの草刈り草ぬき、植栽管理、建築現場の跡片づけ、駐車場や公園の清掃などをやっています。また2年前からはメンテナンスにもそのエリアを拡げ、体育館や住宅の管理などもやっています。

構成は障害を持つ人たち（主に知恵遅れの人）が6



2002.12.24開所の「グループホームわいわい」
(工事中の写真)

名、パートやアルバイトの人をいれて、いわゆる健常者が14名働いておられます。（週平均2～3日の休みがありますので実働は1日それぞれの2／3位）この人数がだいたい3つのグループにわかれて、それぞれの現場を廻ります。だからそれぞれのグループに障害を持つ人が1～2名ですので、ごく自然な形で作業が進行していきます。

例えば草刈りの場合、機械を使うアルバイトのK君（それに軽い知恵遅れとして施設を卒業したK君が一緒に機械を使う）、フェンス際などをパートのYさんやKさんが鎌を入れる。脳性マヒで若干手足の不自由なY君とYさん（近所のおじさんも働いている）が集めてトラックまで運ぶ。この様に各人の状況によって自然にポジションも決まります。

全体からみればたしかに健常者ベースに近いのですが、個々はしっかりとマイベースを守りながら働いています。

力があつてやらないのは互いに指摘すべきですが、力いっぱい努力している人を認めるというのはいわずもがなのことあります。

この様に、福祉という特殊な部分に片寄らず、何とか普通の形で共働の事業をやっていこうというのが基本姿勢であります。だから形態も会社法人へ向けて準備中です。

もっとも賃金の面は、創業5年目でまだまだその基本からは程遠く、障害を持つ人たちの日当は1,200～3,000円でしがありません。もう少し仕事が安定して続いてくれたらいいのですが、思う様にいきません。世間並（以上）なのは借金だけという現状です。

それと福祉行政（県・市町村）からの補助金はもらっていない。運用のはばは許されていようと、やっぱり人件費補助は知らず知らずに上下関係をつくるし、実際もらい始めると悪戦苦闘している共働の毎日が甘くなると判断しているからです。

もちろんその制度そのものを否定はしていないし、また「共働連」で続けられている対行政交渉も支持しています。ただ「なんてん」では、いまなんとか苦しみながらでもやっていくから補助申請をしない

ということで、障害の重い人たちの多い作業所や個人の事業については、その不足分を保障する様に求めるのは当然だと思っています。

「なんてん」ではいわゆる知恵遅れといわれる障害者が大部分で、何とか各人が身動きがとれて働くことができますので、皆で努力して何とか売上げを伸ばしていくと話しています。

いろんな所でいろんな人たちがいろんな形態で自立を考え、実践していったらいいと思います。

(1985.10.25)

私の感想をいうと、「そら、あんたの言うことは普通やし、常識的な考え方やろ、しかし多数やないで」となる。世の多数意見というものは、非常識が多い。だが、「そこまで常識にとらわれんでも……」という気がする。

●知的障害者に仕事をさせるなんて、ムチャではないのか

「なんてん共働サービスの人々」(毎日放送)というビデオを見せていただいた(私の手元にあります)。その中でヤマチャン(最古参の社員)の日曜日が出てくる。彼らは町営住宅を改造した、個室つきのグループホームに住んでいる。「配慮はするが変な気遣いはしない」ので、日曜の昼は自分で食事を確保しなければならない。ヤマチャンはゆっくりとした歩き方で、コンビニに出かける。そこで店の人に、聞き取りにくい言葉で、何とか尋ねながら、手に塗る荒れ止めのクリームとコンビニ弁当を買う。一つを買うのに、迷い迷いするので少々時間がかかる。しかし店の人も心得ていて、ヤマチャンはゆっくり買い物を楽しんでいる。帰って食べたあと、洗濯物を干すシーンがある。そこで隣人に、「ハンガー貸してください」と言うが、その言葉が私には聞き取れないのだが、となりの人は十分聞き取って、差し出してあげている。

このシーンは、福祉関係者の中で見方が分かれたらしい。「車の走っている危ない道を一人で行かすなんて……」という意見と、「自分の思いで外に出ていって、高級ではないが、勝手に弁当を選んで食事するなんて、最高に豊かやないか……」という見方に分かれた。念のためにつけ加えると、夕食はキーパーさんが来て作ってくれる。彼らはその費用を、4人が4万5千円づつ負担している。キーパーのオバサンもいい人だ。「私は、あーゆうひととはじめてで……」と、とまどいながら、「ほ

んとーに、純真でいい人ばかりですよ」といっている。彼らは普通を満喫している。健常者(何が健常なのか)でも賄い付きの下宿にいる人があるし、コンビニ弁当を食べている人もいる。

もう一つビデオのシーンを紹介する。これは、溝口さんが見学に行った、「富山型ディケアハウス」といわれている『にぎやか』という施設の阪井由佳子さんの話。阪井さんは理学療法士としてある施設に勤めていた。そこで、毎日お菓子を袋に入れて、食べることが唯一の楽しみである80才のおばあちゃんが、医者、看護婦、阪井さんなどのカンファレンスで議題になった。「太りすぎているね」という医者の一言で、次の日から“菓子没収”になってしまい、みんながヨーカンを食べているのに、一人だけオレンジを食べさせられている。「私は(阪井)、『ここに百万円とアンパンがあったらどっち取る!』と聞いたんです。『アンパンがいい』というんですよ」「私は、80才やんか、糖尿病でもいいやんか、明日死ぬかもわからん、年寄りの介護はありのままがいい、こんな管理的施設では働けん」といって辞めてしまう。そして、“子供から老人まで、障害者でも、精神薄弱者でもいい”という施設を自宅で始めてしまう。“70や80の老人だけだと陰気くさい、小さい子、歩けるようになった子などがいるとパワーがもらえる”という家の中は、喧嘩そのものである。お年寄りがテレビを見ていると、小さい子が来て「テレビ見てもいいですか」と聞くと、年寄りが「今見てんじゃねーかよ」と怒鳴るような、日常がある。

●仕事の現場では、知的障害者とどのようにして仕事をしているのか

道の掃除に出た時の一カットを、溝口さんが書いている。それを引用する。

『なみだ』

涙。まるっきり見ず知らずの奥さんに涙を流させてしまった。

県道の側溝清掃のとき、契約期間もあとわずかということで、雨の中、みんなでカッパを着ながら作業をしていた。

みんな、わき目もくれず働いていたので、途中で桑原君がいなくなっていたことに誰も気がつかなかった。

道路側の玄関先に険しい表情で立たれた奥さんが、いきなり「どういうことですかッ! 何とかしてください。困ってます!」と怒られた。

「トイレ借りといて、ありがとうもいわす、どころ

か、ひどくあちこちを汚して、どういうことなんですかッ！」

見渡すと、ちゃんと、みんな、いる。奥さんの声でびっくりして手は止まったものの、人数、ちゃんといる。

「おかしいな。みんな、いますけど。誰か、お借りしたんですか？」と聞き返したら、「誰って？名前は知りませんが、おたくの若い人ですよ。本当にイ！」と憤慨やるかたない様子であられた。

もう一度、ぐるーっと見まわしてみると、「あの人、そのお兄さんです！」と歩み寄られた。

「えーっ、桑原。いつ、トイレ借りたんや？ちゃんと、いうてから行く、という約束やったんと違うのか！」と問いつめると、黙ってこちらを睨んだ。

それどころか、「汚してない。(ありがとう) いうた」と、まだぶつぶつ文句をいった。その横柄さにカチンときて、「じゃ、誰が汚したんや？奥さんがいうてはることはウソちゅうのか？ほんまにどういうこっちゃ！」と怒鳴ってしまった。

横から後藤さんも、「ヨーちゃん、謝れ。奥さんに謝れ！」と追い打ちをかけた。

「なあ、桑原。誰であっても、迷惑かけたら、ごめんなさいと謝って、汚したら、元通り掃除をしてくるのが当たり前だぞ。なんてんの誰がウソつけと教えたんか？」と迫ったら、やっと「ごめんなさい」と頭を下げた。

仕事にかかる前に、「お騒がせしますが、よろしくお願いします」と声をかけていたのを見ていて、知り合いの家と勘違いをした様子であった。奥さんの前にじーっと立ち尽くして、一筋、二筋、涙を流し始めた。頑固この上ない桑原君が、珍しく涙した。

自分のしでかしたことの重大さと、ウソをついてしまったことの大変さを思い知ったのだろう。くしゃくしゃにして泣き始めた。

しばらくして、この激しいやりとりをじーっと見られていたその奥さんが、急に泣き始められた。

「すいません。私、汚れを掃除していて、つい、カーッとなってしまったのです」「掃除するくらいなんともなかったのに、きついこといつしまって、すみません」と、いっそう涙多くされてしまった。

「ちゃんというてはったのに、こんなに責めてしまって、そんなに怒られさしまって、どうしよう。本当にすいません」とすっかり立場が入れ替わってしまった。

夕方、気持ちを切り替えた桑原君は、梅子さんと一緒に手土産をもって奥さんのところへ行ってきた。

にこにこと、納得したい顔で帰ってきた。「なんべんも頭下げさして、悪いことしました」と逆に深々と頭を下げられたそうだ。

いやなことやつらいことを恐れては、出会いもぶつ

かりもない。桑原君の心の変化も、私たちの気づきもない。もちろん、怒りや涙やほほえみもない。

●知的障害者が、高齢者デイケアハウスのスタッフだなんて……

息子の名義で借金をし、みんなに借りまくって中古住宅を買い、デイケアハウス「共生舎なんてん」を始めたことは、先に少しふれた。ここは10人余の人が利用しているが、こここのスタッフに知的障害者が勤めている。はじめは、スタッフから反対があつたりしたが、今では、なくてはならない人となって、みんなに親しまれている。結局、スタッフだからといって、あらゆる点で一方的に世話をするだけ、ということになる必要はないのだろう。

●「なんてん共働サービス」の周囲には、たくさんのネットワークがある

はじめにムラオサ論を書いた。そこで溝口さんだけがムラオサであるかのように書いたかもしれない。しかしそれは正確ではない。「なんてん」の周囲にはたくさんのネットワークがある。溝口さんが大学を出て勤めた「落穂寮」の十年以来の仲間を中心とした「七人衆」が「なんてん」のスタートを見守った。もちろん、親、兄弟に始まって、多くのセンターがいる。溝口さんに言わすと「何十人にも助けていただいている」ということである。

ここに2002年12月24日開所する「グループホームわいわい」(NPOワイワイあほしクラブ)の案内があり、名簿が載っている。これが「なんてん」全部のネットではなかろうが、その一端を示していると思うので以下に紹介をする。



デイケアハウス「共生舎なんてん」には障害者もスタッフとして働いている

○融資・出資・寄付ありがとうございました

- ・融資；グループホーム建設 16人
- ・出資；市民共働発電所 11人
- ・寄付・カンパ；物品含む 24人

ムラオサの話に戻ると、これらの人たち全部がムラオサだと思う。複雑な現代社会のムラオサは、一筋縄ではいかず、社会システムとして対応して行かねばならない。範囲も不定形になる。おそらく

く、溝口さんが中心になっている「なんてんムラオサシステム」にも、出身地の九州の人や、あるいは東京の人もいるかもしれない。

個族化社会を支えるのは、多方面に張り巡らされる“新しいムラオサシステム”になるだろう。そしてその活動が、土地にねざした“土地柄産業”的創造にもつながると思う。

(いとおり さだよし)

協同組合 地域づくり九州まちづくりセミナー

黒川温泉繁盛物語

～儲かる旅館組合だから、自前のまちづくり事業ができる～

山田 龍雄

協同組合地域づくり九州では、昨年、第3センターや公社、さらには公民館活動や社会福祉協議会などの公的企業体を対象に、その経営状態や今後の財政見通しなどについてのアンケート調査を行ったところ、最も関心が高かったのは「土地柄を生かした産業起こし」であった。

そこで、協同組合では、アンケートに協力いただいた公的機関の方の要望に応え、また、公的機関の方や賛助会員の方との交流を図るために「土地柄を生かした産業起こし」を実践し、元気の良い地域の代表である「黒川温泉」での現地セミナー（11月21～22日）を企画した。

セミナーの一日目は、黒川温泉繁盛物語の開拓者である新明館社長の後藤さんに、黒川温泉繁盛のいきさつなどをお話ししていただき、二日目は後

藤社長自ら現地を案内していただいた。

現地をウロウロしながら、木の植え方、景観の作り方、お客様のニードなど2時間たっぷりお付き合いしていただいた。

黒川温泉の話は、よかネット49号（2001・1月）に掲載しているが、今回のセミナーで改めて知り得た話、感動した話を紹介したい。

●「旅館改造のお金を借りなければ、後藤社長に相談したらよい」という話

私は、昨年から大分県玖珠町で街なみ環境整備事業のお手伝いしている。その事業の関係者が集まった協議会の休憩時、たまたま隣にいた地元の建築士の方に、何気なく「今度、黒川温泉でセミナーをやり、後藤社長にしゃべってもらんですよ。お暇だったらどうでしょうか。」と投げかけると、なんと次のようないかがわしい返事であった。

「ついこの前、ある旅館の改造の設計と工事をしたときに、後藤社長にお世話をになったのですよ。

オーナーが銀行から改造資金を借りようとしたところ、銀行側から『黒川の後藤社長に相談すれば、金を貸します』という話で、半信半疑だったが、本当に後藤社長にお願いすると金が借りられ



一日目：3時間たっぷりお話ししていただいた



二日目：現地案内しながら、木の植え方や景観づくりを伝授

たのです」。また、建築士の方は「本当に後藤社長が現場に来て木を植えるのだが、あの人が植えると不思議と自然に見えるんだよなあ！」と感心しきった様子で語られた。

銀行は物的担保でしか金を貸さないものと思っていたのであるが、後藤社長のお客さんを喜ばせる雰囲気づくりや旅館経営といったノウハウが担保になるということを初めて知った。このように銀行がソフト的なもの、信頼がもてる人を担保として金を貸すということを、もっと積極的にやれば、地域産業にとっても良くなり、景気も上向きになると思うのだが、いかかであろうか。

セミナーで、この担保の話を、後藤社長本人に確かめると「本当です。私がお手伝いするというと3~4千万円は貸してくれるよ」とあっさりと言われた。

●入湯手形売り上げ180%増なのに、怖い悲鳴

黒川温泉で有名なのが、入湯手形（シール3枚付き）である。1,200円の手形（旅館はシール1枚につき250円を組合から受け取り、組合は200円の収益、製造費250円）を旅館組合から購入すると、黒川温泉24件のうち露天風呂を設けている旅館の中から好きなところ3箇所を選んで入湯できるというシステムである。この入湯システムが旅館組合の主要な収入源となっており、また、このシステムで浴衣を着た女性客（男性客より、やはり女性客だそうだ）が温泉街をウロウロしている風景が、温泉街を生き生きしたものにしているという効果もあるようだ。この入湯手形の売り上げが、昨年より180%増えているが、この理由が黒川にとって非常に困った話なのである。

後藤社長の話によると、最近、増えすぎた入湯手形にうれしい悲鳴ではなく、怖い悲鳴を上げているのである。

それは、黒川温泉周辺に泊まる団体客に旅行エージェントが黒川温泉の入湯手形付きでの営業をしていることが、入湯手形の大きな増加の一因らしい。このために黒川温泉の泊まり客とバッティングし、泊まり客がゆっくりお風呂に入れないといったことも起きているらしく、黒川温泉の魅力低下になってきている。この入湯手形をあてにしている旅館もあり、どのように改正していくのか、もつか旅館組合での悩みの種らしく、解決案はまだ出でていない。黒川温泉の露天風呂では、温泉を

楽しんでもらうことを趣旨としているため、石鹼もおいていなく洗い場も狭く作ってあるので、周辺旅館の団体客の方は、石鹼もなく、サービスも悪いといった勘違いのよからぬ評判もたっているらしい。（ただし、宿泊客は内風呂もあるため、ここでゆっくり身体を洗える。）

●組合事業での利益を、さらなるまちの魅力づくりへ投資

2日目の後藤社長による現地視察で、特に印象深かったことを列記したい。

- ・組合の利益を環境整備にあてており、民地で道路沿いに面したスペースには、環境美化のために後藤流（阿蘇の山々の自然林の風景を模した植え込み）の木々を植えている。

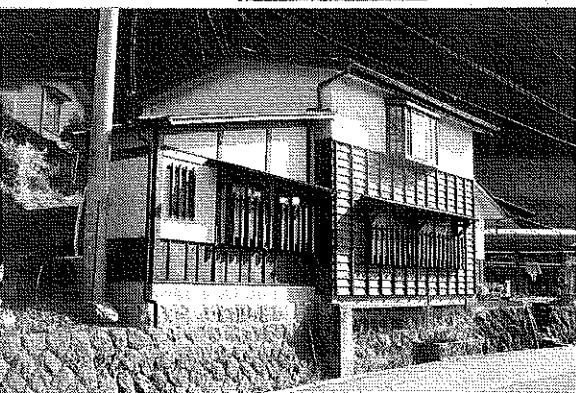
- ・民家の風景を統一するため、白と黒をベースに壁と屋根の色を塗り替えてもらうようにお願いしている。

- ・この黒川の入り口にある案内板は、わかりにくく、車が立ち止まって危ない。旅館もお店も一緒にして、かえってわかりにくくなっている。

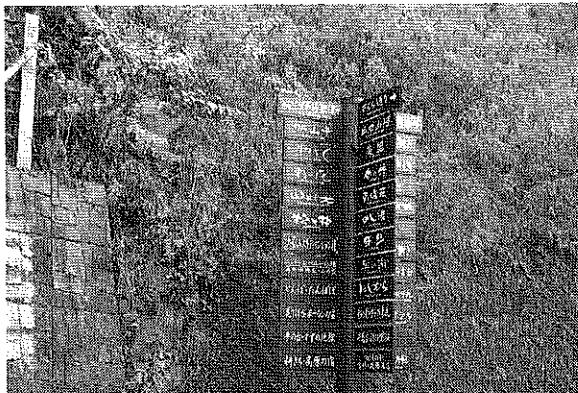
- ・ただ看板をつければよいというものではない。



道路より一段下がった
雑貨屋の道路側の空き
地に植えられた木々



黒と白の色調にしている民家景観改修にも組合がお金を助成する



情報が多くて、すぐに目的の旅館を探すのが大変そうな看板



これは今年植えたものと言われるが、昔からあったように自然に木々が立っている

旅館組合が業者任せにしていると、鉄板製の看板をつけようとしたので、止めさせた。黒川は自然を売り物にしているのだから、やはり木の看板にしないといけない。

・高木は1本で植えては駄目で、2~3本密植しないと自然な感じがしない。また、椿などは並べてしまうと生け垣になってしまい、感動を呼ばないが、高木の下で1本あると感動を呼ぶなどの後藤流自然再生の教えを少しだけ伝授していただいた。

・黒川に来たお客様が、ここガソリンスタンドはおしゃれですねと感心するらしい。

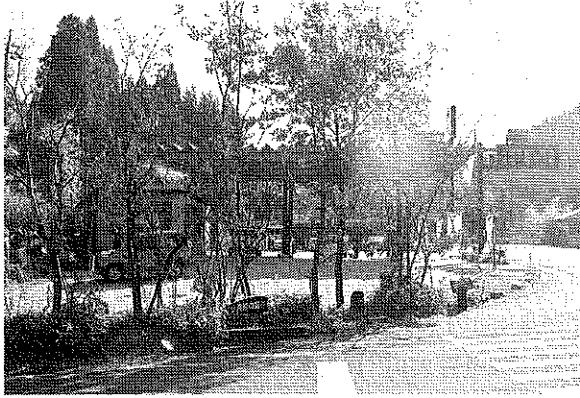
単に角に木を自然に植えたことが雰囲気を変えている

●観光地化しすぎて湯布院の街並みみたいになってほしくない

旅館組合では空き地や斜面地を購入、あるいは借りている。この用地を駐車場に利用したり、木々を植えて、さらなる黒川の環境アップにつなげている。このように組合が空き地を購入することは、東京や福岡の資本が入ってきて黒川に関係



手前が工事ストップ中の鉄板製看板。奥に見えるのが従来の木製の看板後藤社長の景観に対する徹底した姿勢に感服



黄色い広告の旗を消している後藤流の木立群

ない変な店ができるのを防いでいるようだ。

私が常々、湯布院の街並みをつまらなくしているのが、地域に関係ない変な店が多いことであると思っている。観光地化すると外部資本が入ってきて地域の情緒を壊していくのは常である。黒川だけは湯布院みたいになってほしくないという思いがあったために、この組合の土地購入の話は非常に感心するとともに、やはり湯布院のマイナス面を参考にした黒川の先をみた取り組みである。

後藤社長がしきりに「どこの旅館も今は組合なしでは成り立っていかなくなった」と言っておられた。これも旅館組合が儲かっているからこそ、役場に頼らず組合独自で黒川温泉の魅力アップにつながる先手の事業ができるからである。手がける事業が、また、さらなるお客様を呼ぶという好循環になっているようだ。

しかし、さきほど述べた入湯手形問題、旅館個々の質の違い、車の処理の問題など、これから課題にどのように黒川が応え、魅力づくりをしていくか楽しみである。
(やまだ たつお)

**警固神社にプランナーが集まり、
都市周辺地域のまちづくりと
田園居住を考えた**

～九州都市計画シンポジウムの報告～

本田 正明

●シンポジウム（以下シンポ）を始めるきっかけ
はまちづくりを楽に勉強できる方法探しだった

私が都市計画家協会（以下家協会）に入ったのは、今年の8月ごろだったと思う。プランナーとして仕事をしていながら、あまりにも都市計画を知らず、せめて協会に入れば少しは計画家として自覚して勉強するようになるのでは、というまことに主体性のない動機で入会した。

白地地域の調査の仕事をしていたり、田園居住のまちづくりを考えていたので、さっそく家協会が行っていた「都市と田園の境界を探る」という内容がぴったりなシンポの資料を送っていただいた。けれども資料を読むだけではなかなか頭に入らない。誰か教えてくれないかな、同じようなシンポはないかな、と楽に勉強できる方法を探していると「家協会の会員なんだし、シンポを自分でやつたらいいじゃないか」というアイディアを所員からもらった。

それをきっかけに、段取りの大変さなどをまったく知らないまま、講師を呼べば新しい人との縁が出来るメリットがあるなど軽い気持ちでこのシンポを企画したのだった。

●事務局はいいかげんだったが、多くの方にサポートされてなんとか無事開催できた

言い出しちゃったからには当然事務局は自分がしないといけないわけで、シンポの定義すらよく知らなかった自分は、とりあえず辞書で意味を調べることから出発した。シンポの意味が“意見の発表会”だとわかつても、それだけで段取りができるわけでもない。先輩にやり方を聞いてみたり、社内の会議のたびに講師依頼の内容は大丈夫かなど教えをこいた。主催の家協会にも講師派遣やアドバイスをいただき、福岡県にも都市周辺地域の市町村の都市計画担当者を紹介してもらったりと、社内外を問わずいろんな人に迷惑をかけてまわってなんとか開催することができた。

そのおかげで準備期間が1ヶ月しかなかったに

もかかわらず、63名（市町村23名、国・県11名、コンサルタント・NPO24名、財団・大学など5名）の参加をいただくことができた。司会もさせていただいたのだが、たどたどしい進行で関係者を心配させたものの、なんとか最後まで進めることができた。以下では、シンポの内容を簡単ではあるが紹介したい。

＜柳沢厚（c一まち計画室、日本都市計画家協会理事）の講演＞

- ・2000年の都市計画法改正（線引き制度の選択性、市街化調整区域の開発手段の追加、開発許可基準の弾力化）を受けて、地域のために自治体が法律をどう使いこなすかを考えることが必要。
- ・さいたま市で市街化調整区域の土地利用を考えているが、調整区域内での地区計画制度を活用し、農地の宅地化を許容しつつ、地域の景観などに配慮した土地利用を行っていくべきだと提案している。
- ・長野県でも、県として今後どうやってメシを食べていくのか議論している。都市計画でがんばっても、山や田んぼを守る人がいないと環境は維持できない。

＜佐藤誠（熊本大学法学部教授：地域経済論、ツーリズム論）＞

- ・熊本の阿蘇でのグリーンツーリズムの実現に向けて、阿蘇グリーンストック財団をつくり900人くらいで野焼きボランティアなどをやっている。
- ・農村が都市をもてなすのではなく双方が美しい自然の中でライフをエンジョイする”グリーンホリデイ”を提案している。
- ・自分の食べ物を農家といっしょにつくる”スローフード”、地元のカラ松を切ってログハウスを放置された農地に建てて提供する”スローハウジング”、都市と農村を信頼関係で結び、自分らしい遊びの世界を実現する”スローツーリズム”を今後行っていきたい。

＜樋口明彦（九州大学工学部助教授：景観工学）＞

- ・豊かな田園風景が残る福岡市近郊の志摩町で、田園居住の実現に向けた取り組みを行っている。
- ・志摩町の土地面積の25%が町外者所有であり、九大の移転もあるため無秩序な開発が行われる危険性が高くなっていた。
- ・そのため今年始めに町の97%を市街化調整区域



神社でのシンポはかえって新鮮だった
(左から柳沢、樋口、吉田、佐藤各講師)

- にし、グレーブーンでの田園居住の基本計画づくりを行っている。町全体の土地利用ビジョンは町がつくるが、地域のことは地域の人に考えてもらうという発想で行っている。
 - ・田園居住の青写真を早く条例化し、田舎が田舎として胸を張れるテストケースを立ち上げたい。
- <吉田須美生（福岡県企画振興部）>**
- ・都市計画審議会にいくと、自分の土地を市街化区域にしてほしいなどという話を受けることがある。権利が都市計画にはつきまとっているという問題がある。
 - ・日本の場合、開発はもともとどこでもやっていいということを原則にしている。都市計画は土地利用をきちんと誘導していくものだと思うが、最近の法改正は緩和に走りすぎているのではないか。
 - ・経済状況が優先される状況だが、都市計画の制度だけ緩和しても地価は上がらない。小手先だけの状況を生み出すのではなく、きちんとした将来像を描くべき。
- <討論会の概要>**
- ・農家で大きな借金を抱えている人がおり、土地を売って返そうと考えている。そういう農地所有者が土地を売らずにすむような方法はないか。
- 神戸では、集落の中に数は少ないが、宅地の場所を準備し、現金収入を上手に再配分する仕組みを作ろうとしている。(柳沢)
- ・古賀市では、都市計画区域外でのスプロール化が進んでいる。都市計画に編入して地区計画をかけることを考えているが、なかなか調整区域における地区計画の事例がない。地元の人とどう折り合いをつけねばいいか悩んでいる。
- 調整区域内に地区計画を定めても、どつと人が

来るわけではなく、そこに必要な若干な開発を認めていくということ。農水サイドにも、農地を守るために地区計画が必要だと説明できれば理解してもらえるのではないか。(柳沢)

→地元の住民主体の農村計画で、農地を自由に活用できるようになってきている。(佐藤)

- ・コンパクトシティをどう踏まえてまちづくりを考えればいいだろうか。

→コンパクトシティなどと言われているものにぶら下がるのではなく、自分たちで北部九州を引っ張っていく新しいまちづくりを提示するということで構想を考えてほしい。(樋口)

- ・やってしまった開発の疲弊の問題をどのように捉えていけばいいだろうか。

→郊外の区画整理など、出来た瞬間だけが土地が高い減価型開発をやめないといけない。柿の木を植えると毎年成長するので、地価が上がるしくみを内包している。そういう増価型開発の一つの提案としての田園居住である。(糸乘)

- ・日本の建築は、建築確認制度を採用しているが、周辺との関係がまったく無視されるという問題がある。市町村が建物の確認行為をやらない限り、用途指定をしても良いまちづくりができない。(吉田)

- ・法制度には法制度のベクトルがある。そのベクトルに負けないで、市町村がその法制度を使い倒すということが重要である。(柳沢)

●都市近郊で農とかかわりながらの豊かな暮らし、田園居住の実現に向けた仲間づくり始めます！

今回のシンポでは、福岡都市圏近郊の市町村の方々に数多く参加をいただき、改めて都市周辺のまちづくりのあり方が問われていることを感じた。

これからは、“どの地域でもできる画期的なまちづくりの手法”なんかを信用すると大変なことになってしまないので、私はお客様は誰なのか、そのお客様は何を望んでいるのかということを考えながらまちづくりの仕事に取り組みたいと思う。田園居住の最初のお客さんにはまず自分がなりたいと思ってやっている計画であり、同じような思いを持っている仲間を集めて、早く実現を目指したいと考えているので、田園居住してみたい方はご連絡ください。

(ほんだ まさあき)

<田園居住のよびかけ（チラシ）について>

この号に、田園樂住の会（仮称）のチラシが入っています。40～60分で通勤できるぐらいの所で、「300坪＝1000m²」の宅地に、若い人でも住めるようにしようというものです。ネライを列記しますと、①農家＝地主に月々地代が入るようにする、②造成を最小限に抑えるので地価が上がらない、③工事費が少ないのでリスクは小さい、④したがって、初期の土地代負担が少ないので若い人でも住みつける（月々の地代は払う）、⑤造成で破壊しないので緑が残り環境が良くなる、⑥敷地内の菜園や花壇で、農ある暮らしを楽しめる、⑦農家のひととの付き合い、農作物の作り方を教えてもらえる、などです。

まず会を発足させて、みんなの希望をまとめていきたいと思います。その上で、こんな計画に興味のある市町村の役場と相談し「これだけ住み着きたい人がいる」という希望をもとに、地主を探します。すぐ住み替える気持ちではなくても、一緒に考えてみようという方もご参加ください。身近の人にもご紹介をお願いします。

(糸乘貞喜)

にぎわいづくりは手作りで

～「もりまち町並み美術館」の取り組み～

小田 好一

最近、私が実感していることに、女性、または男女を問わず若い人がのびのびとまちづくり活動を行うことのできる環境があるところは活気があって、明るいことがある。

玖珠町の森地区は旧森藩の城下町であり、城下町の骨格や明治期以降の町並みが今も残っている。また、口演童話（童話を日本中の子供たちに聞かせてまわった）で有名な久留島武彦氏の生誕の地であることから、「童話の里」としてまちづくりに取り組んでいる。古い町並み、多くの神社仏閣、山々に囲まれた地形などから、何となく昔話に出てきそうな雰囲気を有している。

もりまち町並み美術館は11月7日（木）～11月10日（日）の4日間行われた。現在、森地区の町並み活性化をお手伝いをしており、7日（木）の晩に住民の方との話し合いがあったのだが、終了後、誘われるままに、森にある食事処「金太郎」に寄った。そこでは町並み美術館第1日目のお疲れさま会（仮称）が行われていた。これまで美術館づくりに奔走してまわった話をしてくれたのは、玖珠町のお絵かき人のひとり、「おのいづみ」さんである。

●玖珠町の歴史遺産の模型をつくろう

玖珠町の中心市街地には豊後森駅があり、駅構内には全国に2ヶ所しか現存しない蒸気機関車の機関庫が残っている（1934年完成）。（もう1ヶ所は京都市梅小路。博物館として整備されている。）

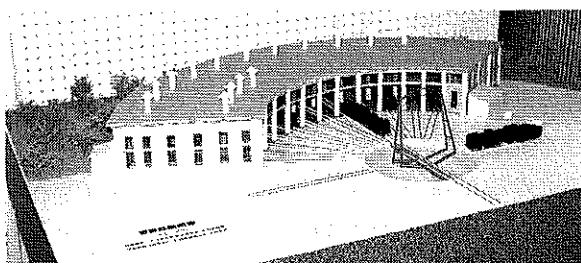
おのさんはかつて、建築模型をつくっていた経験もあり、この機関庫の模型づくりの中心スタッフだった。この模型は今年の美術館の目玉だった。

おのさんは北海道出身で玖珠町在住、いわゆるよそ者なのであるが、まちづくりに“よそ者の目”が大切なのである。機関庫を初めてみたときの感動を語ってくれた。

「機関庫の窓枠は絶妙なパターンでつくられていて、機関庫の窓にはもったいないくらいのデザインなんです。機関庫の柱は円柱でなく、多角形でできているんです。きめ細かなデザイナーのセンスが光っています。」

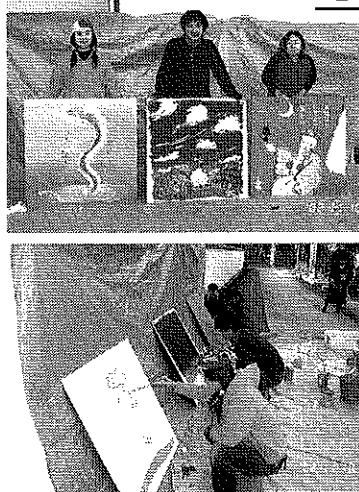
機関庫は1970年の久大本線SL廃止以来、使われておらず、廃墟と化している。構造体は老朽化がひどく、早い時期に改修したいとの声が住民からあがっている。また、窓枠は残っているが、ガラスは割れ放題、壁はコンクリートの打ち放しでつくられており、中にはいると昼間でも薄暗く、不気味である。私はこの不気味さに圧倒されて、窓や柱のデザインなど目に入らなかった。

2日後の土曜日、改めて昼間に町並み美術館を訪れた。おのさんも来られていて、段ボールでできた模型の説明をして下さった。「この模型は機関庫が将来こうなってほしいという姿を形にしたも



おのいづみさんが中心になって作成した機関庫のダンボール模型

もりまち町並み美術館の様々な手づくり企画

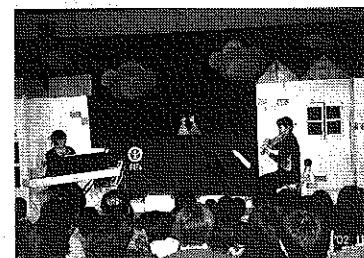


“お絵描きライブ”
一番右の写真は、森の名物語り部の「源じい」さん。源じいさんは、地元イベントでも活発に活動しておられ、「寄ってらっしゃい、見てらっしゃい」と喜寄せから始まり、お得意の語りをしていただいた。お絵描きライブとは、源じいさんのされるお話から、想像できる情景をお絵描き人3人が即興で描きあけるというもの。
左上が完成の図。
写真左からSatokoさん、少路和伸さん、おのいずみさん



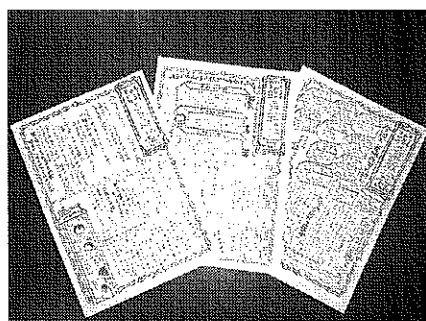
“お宝オークション”

お絵描き人、Satokoさん、おのいずみさんの作品のほか、少路和伸さんが、このオークションのために描いた作品も出品された。



“ピアノとヴァイオリン&人形ボードビル”

実行委員のメンバーの伝を使って演奏、人形劇を依頼して実現した企画。音楽に合わせて歌を唱ったり、人形に話しかけたり、子供たちは健気だ。



まちなみ美術館の準備段階から地域の関心を高める「(竹)瓦版」

美術館開催の数ヶ月前から、月に1度実行委員の手作り新聞が発行された。町並み美術館の企画紹介、進捗状況、協力依頼の呼びかけをされた。瓦版の前に“竹”が付いているのはかつて森町の町並みの家屋に竹瓦が葺かれていたことに由来するもの。

のです」ということだった。

豊後森機関庫は保存に向けて、2万2千票の署名を集め、町長に提出したところである。機関庫は、シンボルとして残し、周辺を公園として整備するものである。今後、どのような動きがあるか楽しみだ。

● “よそ者”が“名物”に

森にすんでいる高校の先生が大阪を訪れた際、森の町並みにぴったりのイメージである絵を見つけた。

その絵を描いたのは大阪在住の少路和伸さん。少路さんの絵は空の色彩がとても美しく、ほのぼのとした絵をかく画家である。その先生はその後、町にかけあい、結果、少路さんは様々なイベント

に出演するようになり、玖珠町ではちょっとした有名人になっていた。

そんな時、町並み美術館にも参加してもらえることになり、少路さんの展示コーナーも町並みのなかに設けられた。その後、美術館の実行委員とも親しくなり、今年も参加。「これから毎回参加します」と宣言したそうである。

今年は、去年と違う新しいことをしようということで美術館開催の1ヶ月前くらいから、玖珠に来て、毎日、紅葉の美しい玖珠の山に通い、一枚の絵を完成させていた。その絵をオークションで売ろうというのである。この絵の出品でオークションはとても盛り上がったそうである。今では、町並み美術館になくてはならない存在になっている。

●いつのまにやら大きなことに

森の町並み（本町通り）の真ん中あたりに、「金太郎」という食事処がある。町並み美術館の言い出しちゃのひとり Satoko さんはそこで、おいしい食事を運んでくれる。Satoko さんは森のお絵かき人の一人で、暖かいメッセージの入ったかわいい絵を描かれる方である。もうひとりの言い出しちゃは図書館の司書をしている吉野さんである。彼女はとても繊細な切り絵をつくられる作家である。二人とも自分たちの作品の発表の場を模索していたと同時に、紅葉のきれいな時期に森に人がたくさんきてくれるといいなど、話をしていた。すると、みんなこんな機会を待ちわびていたのである。はじめは、こじんまりしたイベントを考えていたが、知らない間に話が大きくなってきた。それまで特に集まりを持ったことがない人たちが、「町並み美術館の開催」という目的で作品を発表したい人、何かお手伝いをしたい人、森を元気にしたい人など、徐々に集まり、2回目の今年も成功に終わった。

このイベントは、ほとんどみんなが“手弁当”でやっている。期間中の看板、ピラ、縁日コーナーのスマートボールの台だって手作りである。また、古障子の木枠などを各家庭から集め、子供たちの絵の展示フレームに使うなど、アイデアでなんでもなるのを実感した。お金がなければないで工夫するし、どうしても必要ならば捻出方法をみんなで考えればよい。それがまた、楽しいのだと思う。行政には頼らない、ということをモットーに取り組んできたこのイベントだからこそ、自由にのびのびとできたのだと思う。

Satoko さんにこの美術館の取材をさせていただいたときに、お客様が何人きたかよりも、自分たちが楽しむことが大事です、と言う言葉が印象に残った。
(おだ こういち)

以下のホームページで文章中に登場した“お絵描き人”的作品を見ることができます。

少路和伸さんのホームページ

<http://www.kazunobu.net/>
検索エンジンで“KAZUNOBU.NET”でアクセス可能。

Satokoさんのホームページ

<http://c2c-2.rocketbeach.com/~satoko-w/menu.html>
検索エンジンで“サトコワールド”でアクセス可能。

おのいずみさんのホームページ

<http://www1.ocn.ne.jp/~izuno/index.html>
検索エンジンで“おのいずみ”でアクセス可能。

お店の壁にカニ、カニ、カニ!

～宮之城町のカニ専門店「かみぞの」～

山田 龍雄

宮之城町は、鹿児島県薩摩郡の中央に位置し、この町の中央部に川内川（せんだいかわ）が流れている。

日本地名大辞典によると「川内川は、熊本県球磨郡白髪岳（しらがたけ）の南斜面に源を発し、宮崎県えびの市を経て鹿児島県に入り、北部を大きく曲流しながら西へ向かい、途中1市5町を通って川内市久見崎で東河川に注ぐ、1級河川。延長137km・流域面積1,610km²。九州では筑後川、大淀川、球磨川に次ぐ河川」と記されている。

この河川は、日本でも屈指の多降水地域で、河川も蛇行している箇所も多いため、昔からたびたび洪水にみまわれているが、この豊かな流量を誇る河川は、河川周辺の穀物地帯を形成するとともにカニ、川エビ、ウナギ、スッポン、鮎などの川の幸をもたらしている。

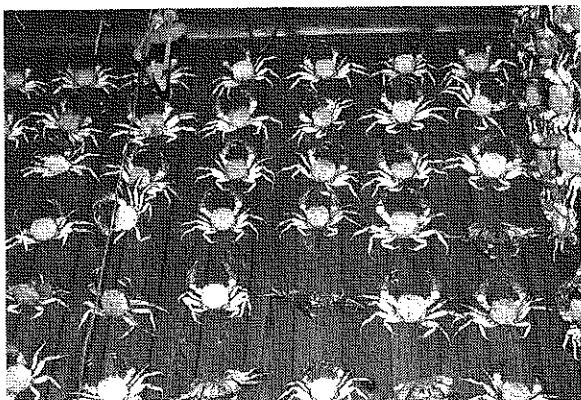
今回、川内川の幸の代表であるカニ専門の店を営業しているお店を紹介する。ちなみにカニの種類は学名モクズカニ（イワガニ科）で、地元では山太郎カニと呼ぶ。

●壁一面にカニがへばりついている

小生は、5~6年前にある店で天然うなぎを食してから、なぜか「旨いうなぎ」に執着している。この町であれば、「天然うなぎ」を食べさせてくれる店があるだろうと思った。

役場でスッポン釣り名人といわれている人に「どこか天然うなぎを食べさせてくれるところがないでしょうか」と聞いたところ、「あの店だったら、食べさせてくれるだろう。ここでは上海カニの親戚も食べさせてくれるよ」という心強い返答をいいだき、仕事の打ち合わせに併せて予約し、伺つた。

この店の表側は普通の民家を改造し、アルミサッシの戸があるだけで料理屋といった雰囲気はないのであるが、座敷に上がると圍炉裏がきってあり、その情緒ある雰囲気に浸っている間もなく、上を見上げると一瞬どきっとする。壁一面に20~30cmのモクズカニが所狭しと張り付けられている



カニが壁をはい上がっているようだ

のである。

この壁カニは、生きたままのカニを炭火で乾燥させたもので、1年に10数匹しか完成しない（乾燥の過程で足がとれるらしい）、特に大きなカニを選んで、10年かかりで壁一面に張り付けたものだそうだ。

しかし、平成9年に、この地域を襲った地震でかなり壁から落ち、修復できていないものもあるらしいので、地震前は、さぞかし密度高くカニが壁にへばりついていたのであろう。

●ご主人の趣味の延長からのお店

もともと、店を始めたご主人は、町内の温泉街である湯田地域で自転車屋を営んでいた。しかし、昭和47年に大洪水に見まわれ、移転を余儀なくされた。ご主人は、根っからの川釣り大好き人間だったらしく、カニなどを捕っては近所の人たちとの宴会を楽しみにしていた。そこで、移転を契機として商売を変えを考えられたときに、この趣味の延長から町内でも川内川下流でカニ専門店を開業したそうだ。

また、昭和61年には河川改修のため、現在の場所に移転し、今日に至っている。

川内川の洪水、改修といった河川の環境の変化で、家も変わってきているという宿命的な川との結びつきがあるようだ。ご主人は3年前に亡くなり、今は奥さんが引き継いでおられる。

●だんだん大きなカニがいなくなっている

現在、昔からのつきあいで14～15名の釣り人から、常時仕入れができるため、原料が足りないといったことはないらしい。

ただし、奥さんによるとダムができたためか、山の環境が変わったためか、とにかく上流での豊富な餌がないことから昔ほど大きなカニが捕れる



カニづくしと天然鮎つきのカニ定食

頻度が少なくなったそうである。自然環境の影響とは敏感なもので、カニの成長に大きく係わるものであり、そういう点では人間がもっとも鈍感のようだ。

●この地域独特のカニの食べ方

奥さんのお話の中で、この地域独特のカニの食べ方に、非常に興味が注がれた。

- ・宮之城町では、そうめんの出し汁に乾燥カニを使うらしく、川内市などではあまり聞かないとのこと。
- ・乾燥カニを煎じて飲むと、内出血に良いらしく、昔からの民間療法として行っていた。
- ・この地方独特の食べ方というより、手間がかかるのであるが、湯がいたカニを殻付きのまま丸ごとスリつぶし、布巾でくるんで絞ったエキスのみのスープをつくり、味噌か醤油で味付けしても美味しい。

このお店では、人手も足りないといった関係もあり、食事の方は予約制であるが、宅配も多く、昔からのつき合いや口コミの影響で東京、福島、島根、九州各県から宅配依頼があるそうだ。ちなみに中型のモクズカニ10匹2,000円（送料別）である。

当日、食したカニ定食は、カニご飯、まるまるカニ1匹入ったみそ汁、天然の鮎付きで1,500円と、いたってリーズナブルであった。久しぶりにいただいた天然の鮎は、ほのかな苔臭い香りがして非常に美味であった。

ご興味のある方は、ご連絡していただければ、連絡先お教えいたします。（やまだ たつお）

「なにわ食いしんぼ横町」は、大丈夫か

山田 龍雄

去る11月11日～12日にかけて、(財)福岡観光コンベンションビューローのお誘いを受け、「第6回国内観光コンベンションビューロー視察団」に参加させていただいた。

今回の視察先は、下表に示すように最近、話題の施設もあり、大阪の観光・コンベンション事情を直接関係者から聞けるという魅力もあって、参加を申し込んだものである。

視察先一覧

- | | |
|-------------------------|--|
| (一日目) | |
| ・海遊館、マーケットプレイス（食いしんぼ横町） | |
| ・大阪国際会議場（グランキューブ大阪） | |
| ・大阪観光協会 | |
| ・大阪府立上方演芸資料館 | |
| (二日目) | |
| ・大阪国際見本市（インテックス大阪） | |
| ・USJ（ユニバーサル・スタジオ・ジャパン） | |
| ・関西国際空港パックスステージツアー | |

いろいろな施設を見て回ったのであるが、私が最も気になったのが、昨年の7月にオープンした「なにわ食いしんぼ横町」であった。

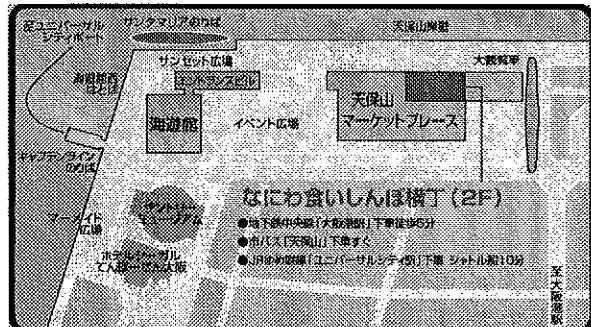
●コンセプトは昭和30～40年代の商店街

この施設は、大阪の南東部に位置する埋め立て地、天保山の一角にあるマーケットプレイスの目玉施設として、施設の一部を改造したものである。コンセプトは、横浜ラーメン博物館と同じように昭和30年～昭和40年代（横浜の方は昭和30年代前半）を想定した街並みを演出している。

この「食いしんぼ横町」は、駅前高架下の商店街をイメージしているらしく、地元の新聞によると開業2ヶ月間（7月20日～9月19日）で入場者数は目標（37万5千人）の約1.6倍の60万人に達し、その後も維持しているらしい。この横町では、「千日前・自由軒」（カレー）、「北極星」（オムライス）、「桃谷いかやき屋」（いか焼き）、「会津屋」（たこ焼き）といった本場のなにわグルメが格安で味わえる店が20店ほど並んでいるのも、もうひとつの売りのようだ。

また、この施設のおかげで天保山にある他の施

なにわ食いしんぼ横町の地図



設（海遊館、大観覧車など）の売り上げも軒並み120～140%増加したこと。

●もう一回来たいと思わないのは何故なのか

この横町をウロウロして、街並みを見ながら、おみやげ屋さんに立ちよって関西系のネーミングでアクの強いおみやげを見て回るのも楽しかったのであるが、なぜかもう一回来てみよう、誰かを連れてきたら喜ばれるといった感覚にはなかなかなれなかった。

「横浜ラーメン博物館」では、ラーメンという庶民の食べ物の代表の歴史展示があることと、「横浜」という冠が付いていても、日本各地の特徴あるラーメンを食べられ、しかも一日に食べつくせなく、何度も来ないとラーメンを制覇できないといった仕掛けがある。

一方、この食いしんぼ横町では、横浜と違ってキーとなるものがもう一つ欠けているように感じた。大阪にこだわらず、ここにすれば日本各地の特徴あるものが“食べられる”、“体験できる”といったものがないとリピート客が減るように思った。今回の視察参加者の何人かの人と話しても同じような意見であった。

このようなアミューズメント施設の宿命でもあるのだが、最初は話題性から半年、一年間はもつのであるが、内容をリニューアルしていくないとお客様に飽きられてくる。

この食いしんぼ横町も、当初のコンセプトを生かしてリピート客が来る仕掛け、演出を今からでも企画して欲しいものである。

（やまだ たつお）

所員近況

新ハーブガーデンと日英グリーン同盟

福岡盲学校でハーブガーデンを作るワークショップを行ったレポートは前々号で紹介した。その後、工事に入り、11月のオープニングと記念植樹に間に合わせることができた。

花壇づくりは、雑草の上でのレベル出しから始まって、砂利と空練りのコンクリートを敷き、水糸に合わせてブロックを水平に並べて基礎を作る。基礎の上にはバーナーで焼き目を付けた角材を腰の高さまで組んでいく。組んだ角材の内側には、土留め用にコンクリートのテストピース（強度を測るための円柱形のもの）を並べ、その中に土と堆肥を入れてハーブを植える。

花壇で囲った内側の広場はでこぼこの雑草地だったが、車椅子でも入りやすいよう土を入れて整地した。

入口にはアーチ、花壇の一角にはレンガでバーベキュー用の窯を作った。窯はハーブ入りのパンを焼くためのパン窯も兼用できる。

簡単に書くとそういう感じだが、大半はスコップと一輪車と人力での作業なので（といってもたまに重機も使うが）、結構な労力だ。天気もいいとは限らない。工事はもちろんグラウンドワークのメンバーや盲学校の関係者を中心に自分たちで行っている。

土日を使っての作業だが、毎回自主参加で進めたため、集まったり集まらなかったり、進まない日もあれば手が余る日もある、という感じで仲々予定通りに行かなかった。この辺は、ボランティアでやる場合の難しいところだろう。（ボランティ



ブロックを並べて基礎を作る

アという言葉は、人によって受け止め方に差があるので最近使いにくい。（ここでは自主参加の意。）

それでもイベントが間近に迫ってのラストスパートが効いて、ほぼ完成した。広場の中央には、会員の工務店関係者の協力（寄付）で、東屋を建てた。全体でかった費用は50万円ほどで、ほとんど材料費、機材のレンタル代といったところだ。

ところで、腰の高さの花壇は、車椅子の人でも楽しめるようにとデザインしたものだが、出来てみるとかがまなくていいので、視覚障害者はもちろん、高齢者も使いやすいし、我々も使いやすい。そもそも、ハーブが伸びてくると、鼻の近くまで届くのでおいやすい。

ハーブガーデンのオープニングと同時に、記念植樹が行われた。今年は日英同盟の100周年ということで、英國大使館などの主催で「日英グリーン同盟」事業が進められている。これは植樹を通して人と人の交流を促進しようというもので、英國で木の王様といわれるオークの苗を植樹する。植樹は全国で171ヶ所が予定されている。

オークは一般的には櫻と訳すことが多いが、実際にはナラ科の櫻・柏の総称で、イングリッシュ・オークは実や葉の形状から柏に近いようだ。

実は福岡盲学校の校章のデザインに使われていたのが、柏の葉だった。そんなつながりもあって、イギリスのグラウンドワークのスタッフ、英國貿易促進事務所リチャード・ライル所長などが植樹に来ることになった。

柏の木は、花壇と一緒に広場を囲むように3本植えられた。数年後（数十年後？）には大きな木陰を作っているかも知れない。

ハーブガーデンは学校の校門近くの広場にあるが、学校としても地域の人たちに来てもらって、



腰の高さの花壇のハーブガーデン

たくさん利用して欲しいとのこと。学校施設の地域開放という意味でも、新しい道ではないかと思う。特殊学校は地域とのつながりが薄くなりがちな面があるので、特にそうだろう。

ところで、グラウンドワーク福岡は12月中には特定非営利活動法人を取得できそうです。今後は委託事業等も受けながら、活動の幅を広げていく予定です。
(伊藤 聰)

■マルクスさんとの対話 その①

落ち葉掃除のために、竹製の熊手型とホウキグサ型の箒を買った。それぞれ一本ずつではあったが、合計340円だった。あまりに安いので「え！どうなっているの」と聞き返してしまった。

その足で散髪屋に行った。入ると、客待ちの椅子に、よく見たわけではないが、私よりは少し年輩と思える方が座っていたので、少し待つつもりで、近くに座ろうとしたら「どうぞ」と言われて見返した。すると少し荷物を片づけて出て行かれるところだった。その間の会話に“櫛”という言葉を小耳に挟んだので、聞き耳を立てていたら、「山中さんのハサミは……」とか「あの人は自分で作っとるけん」とか言う言葉が聞こえてきた。

どう見ても鍛冶屋さんには見えなかつたので「ハサミ屋さんですか」とたずねた。

「ハサミを売りに来ていたんです。あの人は自分でつくっているので、いろいろ言っておくと、次の時にはそのことに答えて、ハサミを作ってくるんです」

「どこの人ですか」

「大阪の方です」

「いくらぐらいするんですか」

「ハサミは5.～6.万で、いいのは7～8万です。櫛は一本7千円」。ここで、櫛を買うという興味はなくなっていたが、店の人たちのそのハサミ屋さんに対する信頼度にひかれてしまった。

「大阪って、東大阪ですか」と少々知ったかぶりで尋ねたら、領収書のようなものを見せてくれた。河内長野市であった。その後ずっと、そのハサミ屋さんことを聞いていた。「あのハサミを使ったら、ほかのは使えん」、「あの人は、ランドクルーザーをどこかに預けていて、それで九州中を回つとる。明日は大分へ行くらしい」、「注文すると明日にでも宅急便で届く」、「おそらく、ケイタイですぐに連絡するのだろう」等々。「この櫛は7千円

で、今買ったところですから、お客様が使いはじめですよ」と言われながら、ひょっとすると私が使えないケイタイのメールも使っているのかな、などと思って聞いていた。

河内長野市は、爪楊枝の生産では95%のシェアだと聞いていたが、ハサミも凄いようだ。

<ところでマルクスさん>

「私もずいぶんあなたにかぶれて居たんですが、箒を作る人とハサミを作る人の労働の価値はどこが違うんですか。ハサミ屋さんについては、店の人が“気持ちを分かって作ってくれる”なんて言ってましたが、工場の方でコンピューター制御機械を、2～3分手入れしてスイッチ押すだけかも分かりませんよ」

マルクス「いやあ、偉いことになつますなー」

「あれ、あんたは語学も天才やつたらしいですが、関西弁もできますのか。労働価値説ではどう説明するのですか。どうもあなたの学説は筋肉労働に重点を置きすぎたんじゃないですか。私はいろいろな仕事をやってきましたが、勘のいい人と悪い人では大変な差です。計画の仕事などでも、何時までも仮説が出てこないと、どんな作業をするかもきまらない。労働の成果なども、それこそ比較にならないぐらいの差が出ますよ」

マルクス「なるほど、今じゃパソコンをうまく使う人もいるようですなあ」

「私に向かってそんな皮肉言わんでも。人間ゆうたら、あなたの200年ほど前のパスカル言う人が「考える葦」やと言つてはりますなあ。筋肉労働やなしに“脳細胞労働価値説”と言われたら好かつたのやないですか。次までよう考えておいてください」

<蛇足>大阪方面のみなさんへ

私も行ってみたいと思っているんですが、興味はありませんか。「山中」という名前もあのセールスマンのものなのか、社名なのかも分かりませんが、河内長野ぐらいなら分かると思って確かめていません。それでも、“職人の気持ちまでくんで作る職人ども”的集団なんて気持ちがいいですね。

(糸乘 貞喜)

懐かしいふたりに思うこと

1990年の9月、学研都市セミナーに当時京都府の商工部長だった小堀さん（現在京都府商工会議所連合会専務理事）を講師に招いて、けいはんなのハイタッチリサーチパークの話をしていただいた。目的は、当時お手伝いをしていた九州北部学研都市構想の推進の中で、地元の中小企業が研究開発をどういう形で進めていけば良いのかを研究し、具体的に研究会を立ち上げようということだった。

セミナーの後、翌年の1月には地元の企業さんたち10数社による研究会を発足させ、経余曲折の後、1994年3月、宗像市に「アステイ21」というリサーチパークが完成し、現在は福岡の地場企業5社と看護大学が立地している。

昨年の秋、このプロジェクトの立上げ時から実現までの間、知恵を出し合い、協力をしてもらっていた九州大学の森永先生とゼネラルアサヒの山口さんのお二人が、相次いで亡くなつた。

森永先生は、地域のために大学の研究者としてプロジェクトに対する助言や指導をしていただけでなく、「NEXT ONE、WHAT NEW」の大切さを教えてもらった。山口さんは、地場企業の立場からプロジェクトに対してどういうサポートが必要か、どうすれば企業は賛同するか、についていろんなアイデアを出してもらった。そんな二人に共通していたのは、立場は違つても地域を良くしたい、元気にしたいという「思い」であった。

二人とのやりとりを思い出しながら、日頃我々が仕事をする時に忘れてはならない「地域への思い」の大しさを、いま改めて噛みしめながら、今年もがんばろうと思っている。（山辺 真一）

一族のルーツを訪ねて～謎はさらに深まつた～

我が家には、ルーツを示す一枚の紙がある。それには、長崎奉行所へ勤役した先祖の名前と勤役年数の一覧が書いてある。いわば系図を示しているものである。祖父が書き写してきたものらしく、それ自体はやたら古いものではない。しかも青焼きなどでコピーしたものも数枚ある。

最初に書かれてあるのは伊藤雲理斎（うんりさい）という人で、元亀2年（1571）から始まる。秋月から長崎へ來たらしい。我が家ではこの人を初代としている。次の伊藤久右エ門が慶長9年（1604）に役を仰せ付けられ、寛永6年（1629）ま

で勤役26年とある。それから同様に15人の名前と勤役年が並ぶ。一覧の中の最後は隆次郎という人で、明治2年（1869）までとなり、後は明治維新で職を失っている。その次は私の曾祖父であり、仏壇に写真もあるので実在は間違いない。これからすると、私の父は18代目、私が19代目、5歳になる息子が20代目となる。約430年で20代であるから、1代当たり平均20年ちょっとで、だいたい合っていると思う。

明治後期に曾祖父が炭坑で栄えていた筑豊の直方に来た。現在の伊藤家の墓は祖父の兄弟で直方市の西徳寺に建てたものがあるが、それまでは長崎市寺町の三宝寺というお寺にあった。

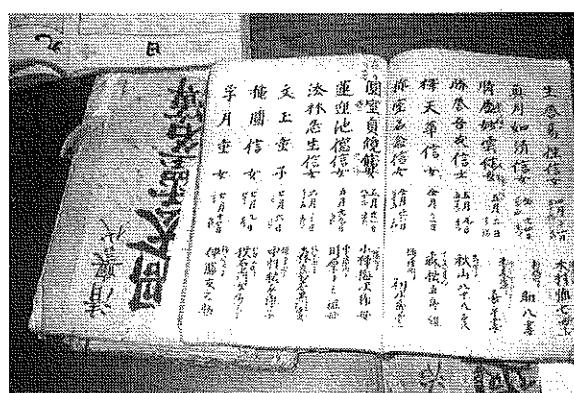
私の祖父は1902年生まれ（日英同盟の年）で、亡くなつて10年以上経つが、今年が生誕百年ではある。そんなこともあって、ここ数年、一族でルーツ話が盛り上がつていて。

長崎の墓参りは、数年に一度誰かが行くか行かないかという程度だった。そこで、みんなで墓参りしよう、それと、三宝寺に行けば祖父が書き写したとされる家系の表の元資料が分かるだろう、ということで、親族一同で長崎ツアを行つことにした。

福岡県内在住が多いのだが、東京方面にいる親族もあり、何人か欠席したもの総勢15名のツアーとなつた。最高齢は祖父の妹で82歳、下は私の娘で生後6ヶ月という、4世代での旅行である。

長崎の寺町は古く、道も狭い。墓地は寺の裏の斜面一帯にあるが、坂道はきつく、入り組んで迷路のような所である。ただし、眺めはよい。

私自身は8歳の時に一度、そして5年ほど前に1人で出張がてら来たことがある。前回は、小さいときのイメージを頼りに探したのだが、結局お



三宝寺の過去帳。左端に「桶屋町・伊藤」がある

寺で場所を聞いてたどり着いた。着いてみれば、やはり小さい頃のイメージと同じだった。しかし今回行ってみると、5年ほど前の情景が強く残り、小さい頃のイメージは自分で薄れていた。余談だが、北朝鮮の拉致帰国者が地元の人よりも昔のことをよく覚えていた、という話は実感として分かる。最後のイメージが最新のイメージだ。

墓石の数年分の雑草とコケを落として、お参りをし、その後お寺を訪ねた。

三宝寺の住職は代替わりをしており、昔のことを詳しく聞くことはできなかった。その代わり、事前に連絡しておいたので、過去帳を見せてもらうことができた。過去帳には、いつ、どこの誰が亡くなったかが記されていた。たまに何歳か書かれてある。しかし、住職によれば、寺にある過去帳はおよそ260年分だという。約400年の伊藤家の資料の方がさかのぼっているではないか。昔のお坊さんは、過去帳は自分用で、寺を変われば過去帳も持っていたらしい。

過去帳の名前は基本的には戒名だが、俗名や家長らしき人の名も書かれてあったりするので、それが手がかりになる。先祖は市内の桶屋町に住んでいたことが分かっているので「桶屋町・伊藤」を探せばよい。

ところが、過去帳は葬式を行った順に書かれていて、和紙は破れそうで、文字は時に読みにくく、しかも資料は膨大である。めくってもめくっても「桶屋町・伊藤」はそう簡単には出てこない。いくつかは見つけたものの、こちらの手持ち資料は直系の男子の俗名と勤役年だったので、直系以外も含めた戒名と死亡年をみつけても一致は難しい。ちょっとお寺によって過去帳を見たくらいでルーツが判明するなんて、到底無理であることが分かった。(実は、実家の仏壇の中に一族の亡くなった年と戒名の一覧があり、これと一致する可能性はある)

過去帳をデータベース化しないんですか、と無駄なことを聞くと、「データ化したものはいつまで使えるか分からぬ。結局、長い目で見ると紙の方が確実に残ります」とのこと。それはそうだ、百年単位なのだから。

結局、書き写したとされる、奉行所への勤役の資料はお寺では分からなかった。郷土史か何かの資料としてあるのだろうか。

住職の話では、長崎は原爆のため資料も相当焼失したらしい。過去の資料がどこまで出てくるかは分からない。ただ、祖父が系図を書き写したのは戦後のことだ。

我が家のルーツ探しの旅は続く。

(伊藤 聰)

翻広報担当をきっかけにいろんな出会い、体験をさせてもらっている。

前号の「ある青少年育成団体に所属して思うこと」にも書いたが、約900名のある団体の機関誌の広報を担当することになった。本誌よかネットの記事を執筆、編集にこれまで携わってきたことが役立っている。(編集は所員の持ち回り)

最近、団体の機関誌の編集をきっかけにいろんな人と出会い、いろんな体験をさせてもらっている。

その機関誌では、決算報告や役員人事など、各種団体広報誌のありきたりの内容は極力減らし、900名のメンバーの情報、知識、経験を活かしたものにした。12月中旬の発行に向けて、11月中旬頃から記事づくりのため、様々な方と出会うことになった。

まずははじめに青年海外協力隊の日本語教師としてコートジボアールで活躍した人の取材、あまり聞くことのないその国の文化を聞いた。

女性はとにかくおしゃれなようだ。服は布を買って仕立て屋で自分好みに仕立てるのがスタンダードであるようだ。布の柄は実に多種多様でまちあるきが楽しくなるということだった。

学校の制服(女性の場合)は柄が全国決まっていて(赤白、もしくは青白のチェック地)服のデザインは全く自由ということだった。女性の髪の毛はいろんな編み方をして飾り、頻繁に変えるということだった。美に対する執念はどの国も変わらないことを知った。

ある分野に異常に詳しい“マニア”をとりあげたコーナーでは「真空管」の話をうかがうことができた。電子機器の心臓部がIC、LSIなどの半導体に置き換わった現在でも、音響機器や電子楽器の分野では音にこだわる人は真空管が使用されているものにたどり着き、特に西欧諸国では未だにかなりの数が流通しているということだった。

地域のおすすめを紹介するコーナーでは折尾にあるチャンポン屋を取り上げた。店の中の雰囲気

近況

は昭和40～50年くらいで時間が止まっていた。チャンポン一杯200円だった。130円のクリームせんざいも人気商品だった。まわりを見回すと高校生ばかりだった。携帯電話が普及した現在でも、このように昔から続く高校生のコミュニケーションの場が残っていることになんだかホッとした。

フリーマーケットにも参加し、自ら段取りし、不要品を集めてまわった。近年、リサイクルショップが乱立しているがその理由がわかった。女性のファッションはブームが去ると洋服がここにくる。また、お中元、お歳暮、結婚式の引き出物の墓場もある。日本の豊かさを改めて感じることになった。売れ残ったものは海外に送れないかななど考えたが、様々な機関を経て届けられるため、人件費がかかり、新品を支給するよりも金がかかるといわれた。

今後は、機関誌を団体内で閉じたものにするのではなく、もっと外に向けて発信、また、逆によそを引き込むような取り組みを行って、団体外とのネットワークを強めた記事にしていきたい。

(小田 好一)

■ボランティアは体力勝負！

昨年8月から毎月1回、日曜日にNPO法人地域生活支援センターForza(よかネットNo.56で紹介)が知的障害児・者を対象として行っているレクリエーションに、ボランティアとして参加させてもらっている。昨年度、新宮町と築城町で障害者福祉計画策定のお手伝いをさせてもらったが、その仕事をしながら、私自身があまりにも障害者のことを知らなすぎるな、ということをいつも考えていた。ここで全てが分かるとは到底思っていないが、少しでも何か得るものがあったらいな、という気持ちで参加している。

このレクリエーションは昨年4月から、社会福祉・医療事業団の助成により行われているものである。Forzaの利用者だけではなく、参加者を新聞などで広く募ったそうだ。動物園探検、陶芸体験、宿泊での自然体験(8月)など、毎月様々なメニューが用意されている。

レクリエーションでは参加者1人にボランティアが1～2名つく。最初の頃はボランティアとして参加しているが何をすればいいのか、どこまで手助けをしていいものなのかが分からず、随分戸惑っていた。最初に参加したメニューが、1泊

2日という時間を過ごす宿泊体験だったこともあり、2日目には「自分がどうこうしようと考えるよりも、自分が担当している子が楽しい時間を過ごせるようにお手伝いができればいいな」という考え方を持って担当の子に接することができるようになってきた。

ボランティアとして参加する事がだんだん楽しみになってきているのだが、そのたびにあまりの体力のなさに自分自身驚いている。毎回3～4時間という短い時間にも関わらず、終わる頃にはもうくたくた。中でも動物園へ行ったときのこと。広い園内を約2時間あちこち歩き続けたため、解散になったときには息が上がってしまった。普段からあまりにも体を動かしていないなと思っていたが、そのつけが一気に回ってきたといった感じだった。

こんなことじゃだめだ、少しずつでも体を動かして体力をつけないと・・・と思っているが、未だ行動には移っていない。新しい年の始まりとともに、体力づくりにもう少し気を配りたいなと思う次第である。

(梶原 里香)

■編集後記

毎年、正月号の編集は、年末で印刷屋さんが忙しく、通常より原稿締切を1週間～10日近く早めないといけません。今回は編集担当の(さ)さんの粘り強い声かけ運動の甲斐あって、珍しく締切日に全員の原稿が揃いました。感謝！

「よかネット」も今年で11年目を迎えます。今後とも普段の仕事や遊びの中から“思い”的ある記事を掲載していきたいと思っています。

(だ)

よかネット No.61 2003.1

(編集・発行)

(株)よかネット

〒810-0001 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハピエ5F

TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

<http://www.yokanet.com>

mail:info@yokanet.com

(ネットワーク会社)

(株)地域計画建築研究所

本社 京都事務所

TEL 075-221-5132

大阪事務所

TEL 06-6942-5732

東京事務所

TEL 042-501-2531

名古屋事務所

TEL 052-265-2401

(株)地域計画・名古屋